

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 20 日現在

機関番号：34315

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23501252

研究課題名(和文) 現代ネパールにおける畜産物交易の持続

研究課題名(英文) Continuity of trading of livestock products in contemporary Nepal

研究代表者

渡辺 和之 (Kazuyuki, Watanabe)

立命館大学・文学部・非常勤講師

研究者番号：40469185

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,900,000円、(間接経費) 1,170,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、自動車道路の開通した現在でも、ヒマラヤ交易が形を変えて継続していることを、ネパール国内での現地調査によって実証した。特に畜産物に注目し、その生産から消費に至る流通経路を調べることで、交易を支える諸条件を明らかにした。この結果、交易が山地住民の農業・牧畜・森林利用の複合経済を基盤とし、他地域や都市や海外とも関わる交易ネットワークに支えられることが示した。また、とかく一方向的に都市の商品が流通すると見られていた山地経済を見直し、出稼ぎ経済の浸透で過疎化する山地経済を支え、存続する基盤は何か考察した。

研究成果の概要(英文)：This research shows trans-Himalayan trading is also continue today even after establishment of motor roads. Fields works are carried out in Nepal. Especially focused on livestock products, process of the trading from production to consumption and conditions which support the trading itself are elucidated. As a result, the research concludes the trading is supported by complex economical activities of mountain peoples, such as not only farming, pastoralism, and forest usage but also trading networks which are linked cities and foreign countries.

研究分野：地理学

科研費の分科・細目：地理学・地理学

キーワード：地誌学 ネパール ヒマラヤ交易 畜産物

1. 研究開始当初の背景

ヒマラヤ山脈の南斜面に位置するネパールには、成長が続くアジア諸国のような工業化は進まず、観光以外にこれといった産業もない。それゆえ、交易は人々の重要な生活手段であった。チベットとインドに挟まれた地の利を生かし、ヒマラヤ山脈の通行可能な峠道を、人や家畜が行き来したことは古くから研究されてきた。ただし、この交易は 1960 年代のチベット動乱に伴う国境封鎖を境に衰退したと考えられてきた。

申請者はネパールで牧畜を研究し、その畜産物の流通を調べるうちに、ヒマラヤ交易は形を変えながら現在に続いているのではないかと考えるようになった。ヒマラヤ交易が自動車道路の開通した現在でも形を変えて継続していることを証明できれば、交易が山地住民の農業・牧畜・森林利用の複合経済を基盤とし、他地域や都市や海外とも関わる交易ネットワークに支えられることになる。このことを現地調査で実証することで、21 世紀における地域間交易の見取り図を描くことができるのではないかと考えた。また、交易の見取り図を描くことで、とかく一方向的に都市の商品が流通すると見られがちだった山地経済を見直し、出稼ぎ経済の浸透で過疎化しつつある山地経済の存続を支え、振興するための基盤は何か考察することにつながると思うに至った。

2. 研究の目的

本研究では、ヒマラヤ交易が畜産物の交易という形で現在でも継続することを示すため、現地調査によって、次の 4 点を明らかにする。すなわち、(1) 山地における畜産物の流過程、(2) 山地における交易と自動車道路との相互関係、(3) 交易センターとしての首都の役割を解明することで、(4) 畜産物の生産から消費に至るフローを分析し、交易ネットワークを支える諸条件を考察することをめざした。

3. 研究の方法

現地調査に際しては、ヒマラヤ交易の研究蓄積が多い東部ネパールを中心とし、高度の異なる東部高地、東部中間山地、東部低地の 3 地域で調査を実施した。また、これらの地域で生産された畜産物がいかに流通してゆくのかを追うため、中部高地、中部中間山地(首都)、中部低地の 3 地域で車両の通行調査を含めた流過程を調査した。このうち、牧畜に関わる東部を代表者の渡辺が担当し、中部をおもに分担者の橋が担当した。

各年度における調査地と役割分担は次の通りである。

(1) 2011 年度は、渡辺が東部高地と東部中間山地で羊毛利用の調査をおこなった。また、橋は中部低地において豚肉交易の現地調査をおこなった。

(2) 2012 年度には、渡辺が東部高地と東部中

間山地で定期市の調査をおこない、乳製品や肉などの流通事情を調査した。東部中間山地の村では、羊毛の織り手の減少も調査した。橋は中部低地を訪れ、鶏肉の流通に関する調査をおこなった。また、自動車道路を通じた交易の現状を把握するため、渡辺と橋の 2 人で中国チベット自治区とネパールの国境を訪れた。

(3) 2013 年度には、これまで訪れることのできなかった東部低地と中部高地を渡辺が訪れると同時に、すべての地域における交易の結節点となる渡辺と橋の 2 人で首都カトマンズでの調査をおこなった。

4. 研究成果

(1) 山地における畜産物の流過程。

東部高地では、ソルクンブー地方で調査をおこなった。同地域の南部にはチベット難民の絨毯工場があり、その原材料がどこから流通するのかが懸案だった。だが、当初予想したようなかつての峠越えの山道ではなく、スイスからカトマンズを経て空輸するものであることがわかった。この工場は 1960 年代にスイス政府が難民対策の一環による援助として設置したもので、1996 年には閉鎖し、首都の難民キャンプに統合したことがわかった。ただ、難民たちが自宅で個人的に織る絨毯はわずかに残っており、地元の定期市でも売買していた。また、当初の予想通り、峠越えの山道を通る隊商は 2011 年頃に中国当局の取り締まりが厳しくなるまで続いていた。羊の乾燥肉、脂肪、毛布などが中国製の家電製品や生活雑貨と一緒に山を越えて流通していたことがわかった。

東部中間山地では、ネパール産の羊を移牧によって飼養しており、洗って縮ませる特徴を利用し、羊毛の敷物を生産していた。ただし、その織り手の数を 1990 年代の調査結果と比較すると、激減していた。ただ、まだ敷物に対する需要はあるため、羊毛を入手しやすく、家族の援助がある人が細々と続けていることが明らかになった。また、その一方で首都圏では国外から輸入した羊毛や化学染料を使って羊毛敷物を生産している例があることもあきらかになった。

東部低地は、東部中間山地帯の羊飼いが冬の放牧地とする所であり、その羊を購入し、肉として売る商人がいる場所でもあった。調査の結果、これらの商人はまだ羊飼いや買付を続けていた。ただし、その多くは首都カトマンズに家を構えるようになっていた。また、東部低地にも出稼ぎが拡大し、耕作放棄地が増えていた。その一方で、自動車道路が通じた場所では、商品作物となる香料も増えており、香料を植えた場所では羊を放牧してはならないなどの問題も発生していた。

中部高地でも、東部高地と同様に 1960 年代まで山越えの交易ルートが使われていた。ただ、当初予想したような家畜の売買は現在ではあまり続いていなかった。ヤクや馬の売

買は隣の地区（ランタン、ゴサインクンド、ヘランブーなど）とはおこなっているが、中国側の町であるキールンとはおこなっていないとのことである。ただし、羊については、現在でもチベット産のチャングラ羊が秋のヒンドゥー教の大祭前にやってきて、カトマンズに運ばれるとのことである。また、ラスワ郡の商人は中国側のキールンまで行って商売する許可証を持っているが、商品のほとんどは首都カトマンズから流通したものであり、中国からの物資はほとんどないことがわかった。

中部低地では研究分担者の橋がチトワンで狩猟採集や定住農牧に関わるチェパンが利用する畜産物を調査した。その結果、コウモリ猫などで得た野生動物の肉や彼らが飼う家畜の肉などの利用法や流過程が明らかになった。チトワンでは近年、村の近くにバザールが出来きてそこに山のチェパンが肉を売りに行くようになった。また、近年ではチェパンも首都カトマンズや海外出稼ぎへ行くことが多くなり、都市を訪れる際には村の鶏肉をおみやげに持って行くと重宝されるなどの情報が得られた。

首都カトマンズ（中部中間山地）では、羊毛、家畜市場、乳利用を調査した。羊毛については、チベット産やニュージーランド産の羊毛をどのように仕入れるのか、カトマンズの卸売市場で調査をおこなった。また、モンゴル産のパシミナが中国、インド経由でネパールに輸入されていることも明らかになった。家畜市場の調査では、山羊と羊の肉の生産地を聞き取りし、東部山地から流通してくる羊も目撃した。また、水牛の市場では国内産だけでなく、インド産の肉も多いことがわかった。乳製品については、政府の乳業会社に聞き取りへ行き、同社における収入経路や加工工程を知ることができた。

(2) 山地での交易と自動車道路との相互関係

自動車道路が開通することで、交易の主流が自動車道路にシフトしているのではないか。このような関心から、中国チベット自治区とネパールの国境にあるコダリを渡辺と橋の2人で訪ねてみた。残念ながら、チベット側にゆくことができず、ネパール側しか調査できなかったが、現在、チベットから来る商品は、テレビやステレオなどの中国製の電化製品や布団や魔法瓶などの中国製の生活雑貨が主であることがわかった。絨毯の原料になるチベット産の羊毛や秋の大祭前にはチャングラ羊が中国側から入ってくるので、畜産物も交易の対象にはなっているのだが、畜産物は中国側にある卸売り商店から直接首都の市場に流通するため、ネパール側にはこれらの商品を対象とした商店はなかった。

また、カトマンズの家畜市場の調査から、山羊と水牛はインドから通年流通してきており、北の中国よりも、むしろ南のインドの方が畜産物交易はさかんであり、そちらの

調査を優先させるべきであった。羊毛の調査でも、ニュージーランド産の羊毛を輸入するのはインド商人であり、カルカッタ経由で流通することがわかった。また、中国産のカシミアも、カルカッタ経由であり、これらの流通ネットワークを研究する上では、インド商人の役割を解明することが焦点となる。

道路については、山地における畜産物生産や交易を下支えしている点が重要である。東ネパールで羊の移牧が存続しているのも、首都カトマンズともつながる交易ネットワークがあるためでもある。このような視点から山地の生業活動を今後捉えてゆかねばならないと思うに至った。

(3) 交易センターとしての首都の役割

今回、交易の調査をして大きな収穫だったのは、交易の結節点として首都カトマンズの果す役割である。肉の流通では、山地の産物がカトマンズまで流通しており、それらが中央卸売市場に集るのである。そこで働く商人はどの商品がどこから来たのか、事情を心得おり、山地に行く前にカトマンズで調査すべきであった。また、彼らは国外からくる商品についても、豊富な知識を持っており、その伝手をたどって国境交易の調査をすれば有意義になることもわかった。ただ、カトマンズの中央卸売市場に集る商品は、山地の畜産物の頂点を占めるものばかりである。また、遠隔地の畜産物のなかには、首都まで運ぶとコストがかかるため、質はよくても地域内で消費してしまうものも多い。このため、山地の側から交易を調査する手法も決して無駄ではなく、山地と首都の双方から交易ネットワークを捉えてゆくことが有効であることがわかった。

(4) 交易ネットワークを支える諸条件

以上の調査から、山地と首都をつなぐ畜産物の交易ネットワークの一端が明らかになった。当然ながら、それを支えるのは、山地において生産者である農民や牧畜民が存在すること、山地と首都を結ぶ商人の存在すること、都市において山地の産物を消費する市場があることの3点が重要である。また、都市では、絨毯産業に見られるように、輸入した材料を用いた生産システムも確立しており、山地から都市に移住した人々を労働市場に吸収し、そこで生産した商品を海外の市場へ出荷するビジネスが展開している。ただし、その裾野には、定期市のような地域内で完結する畜産物交易があることも忘れてはならない。このようなローカルな産物が、自動車道路の開通に伴い、どのように変容してゆくのか。今後、注目してゆかねばならないだろう。

本研究は、かつての山越えのヒマラヤ交易が形を変えて今日でも持続しているのかとの疑問からはじまった。その答えをあえて述べれば、たしかに持続している面もあるとの

答えに落ち着くのだろう。だが、実際に調査してみると、その姿は当初考えていたよりも、かなり形が変わったものであった。21世紀のヒマラヤ交易は伝統的な山越えの交易とは似て非なるものであると見ることもできない。

いずれにせよ、都市の需要が山地における畜産物生産を支え、新たな交易ネットワークを確立しており、交易は山地と都市の関わりのなかで変容し続けている。畜産物交易はそのなかではマイナーな存在ではあるが、たしかに山地の人々の生活を支えると同時に、都市の人々の需要も満たしているといえる。

(5)研究成果の公開

2012年にはこれまでの調査でわかった成果をドイツのケルンでおこなわれた国際地理学会と、カトマンズでおこなわれた国際シンポジウムで発表した。2013年にはイギリスマンチェスターでおこなわれた国際人類学民族学会と福島大学でおこなわれた日本地理学会で発表した。

5. おもな発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計2件)

Shoko Konishi, Rajendra Prasad Parajuli, Erica Takane, Makhan Maharjan, Kenichi Tachibana, Hong-Wei Jiang, Krishna Pahari, Yosuke Inoue, Masahiro Umezaki, Chiho Watanabe 2014 Significant sex difference in the association between C-reactive protein concentration and anthropometry among 13- to 19-year olds, but not 6- to 12-year olds in Nepal. *American Journal of Physical Anthropology* (Impact Factor: 2.48).154(1). PP.44-51. DOI: 10.1002/ajpa. 22470 (査読有)

R. P. Parajuli, T. Fujiwara, M. Umezaki, S. Konishi, E. Takane, M. Maharjan, K. Tachibana, H. W. Jiang, K. Pahari, C. Watanabe 2014 Prevalence and risk factors of soil-transmitted helminth infection in Nepal. *Transactions of the Royal Society of Tropical Medicine and Hygiene* (Impact Factor: 1.82). 108(4). PP.228-236. DOI:10.1093/trstmh/tru013 (査読有)

[学会発表](計26件)

渡辺和之「東ネパール・サガルマータ県における定期市の変化：北インドと比較して」現代インド研究 HINDAS 研究会。広島大学。2014年1月25日。

Tachibana, Kenichi Changes of the socio-political constellation in Chepang society in the days of democracy. SASON conference NTNC, Lalitpur. 2013年12月15日~12月17日。

橘健一「チェパンの「社会的包摂」と不安・多自然・多民族・個人・」国立民族学博物館共同研究「ネパールにおける「包摂」をめぐる言説と社会動態に関する比較民族誌的研究」、研究代表者：名和克郎、国立民族学博物館、2013年10月19日。

渡辺和之「村落の維持機構としての家畜飼養：ネパールの事例から」日本地理学会現代インド研究グループ2013年9月28日。福島大学。

渡辺和之「ネパール東部高地における畜産物交易：ソルクンブー郡の事例から」日本地理学会。福島大学。2013年9月28日~9月29日(ポスター発表)。

Watanabe, Kazuyuki Who continues the weaving of woolen rug?: A case of the village of sheep herders of East Nepal. Panel MMM09 The Emerging World of Pastoralists and Nomads. IUAES Commission on Nomadic Peoples. The University of Manchester. 2013年8月7日。

Tachibana, Kenichi Perspectivism between/through deer and tigers: Prey/predator relations and the concept of souls in Chepang of Nepal. IUAS International Conference. University of Manchester. 2013年8月5日~8月10日。

Watanabe, Kazuyuki Changing relationships of access to pastures: How Nepalese sheep herders negotiate on their migration routes? Panel: Mobility and Pastoral land management in Asia and Africa. The Kitafuji conference, the 14th Global Conference of the International Association for the Study of the Commons. Fuji Yoshida. 2013年6月7日。

橘健一、「ネパールの「民謡」をめぐる景観について・音楽の変換と流通のかたち・」国立民族学博物館共同研究「グローバル化の中で変容する南アジア芸能の人類学的研究」、研究代表者：松川恭子、国立民族学博物館、2013年5月18日

渡辺和之「ヤギとブタ。ドライブや低カーストはどちらを好むのか? 東ネパールにおける農民の家畜飼養と交易」日本地理学会。立正大学。2013年3月29日。

渡辺和之「チベット難民キャンプにおける絨毯産業の盛衰。東ネパール・ソルクンブー郡チャルサの事例(ポスター発表)日本地理学会。立正大学。2013年3月29日。

渡辺和之「村に残った人々の暮らしはどう変わったのか? 東ネパール、ルムジャタル村における家畜頭数、耕作地、村落開発委員会における女性とダリットの役割の変化」国立民族学博物館共同研究「ネパールにおける「包摂」をめぐる言説と社会動態に関する比較民族誌的研究」研究代表者：名和克郎。国立民族学博物館。2013年1月12日。

Watanabe, Kazuyuki Changing Use of

Pastures: A case study of the sheep herders of East Nepal. International Symposium Changing Mountain Environments in Asia. Tribhuvan University and Hokkaido University. Hotel Himalaya. 2012年10月9日。

橘健一、「ネパール先住民チェパンの動物認識における『観点主義』と『多自然主義』」第25回日本南アジア学会全国大会、2012年10月6日、東京外国語大学。

Watanabe, Kazuyuki Himalayan pastures are overgrown on this side: Land use history of Nepalese transhumant sheep herders. International Geographical Congress. The Universitat zu Koln. 2012年8月29日。

渡辺和之「2012「ネパールにおける家畜・家禽の伝染病被害と個体の回復過程」生物文化誌学会。福岡リーセントホテル。2012年7月14日。

橘健一「呼ぶと応える動物たち・ネパール先住民チェパンにおける魚、風、コウモリとムシ」、生き物文化誌学会第10回学術大会、2012年7月14日、福岡リーセントホテル

渡辺和之「ネパール・ヒマラヤにおける山地社会の変化と羊飼いの現在」国際山岳年プラス10シンポジウム：日本大学2012年6月23日。

渡辺和之「コメント：災害常襲地の歴史人口と人口変化：山岳地域の環境と災害を例に」人口学会。東大駒場。2012年6月3日。

渡辺和之「羊毛織物ラリを織り続ける人々」日本地理学会、首都大学東京。2012年3月28日。

①渡辺和之「山地の家畜と平地の家畜」『シンポジウム：モンスーンアジアの家畜飼養を考える』奥州市牛の博物館。2012年3月18日。

②渡辺和之「タライ調査報告：ネパール・ルンビニに在来ブタを訪ねる」熱帯家畜利用研究会。奥州市牛の博物館。2012年3月17日。

③渡辺和之「東ネパール山村における羊・山羊の伝染病被害」生き物文化誌学会、東京農業大学。2011年11月12日

④橘健一「ネパール中間山地先住民における狩猟採集と動物解釈」生き物文化誌学会第9回学術大会、2011年11月12日、東京農業大学。

⑤Watanabe, Kazuyuki Land Use History and Periodical Market : Rural-Urban Relationships among Wajima of Ishikawa prefecture, Japan (1989-2011). Conference of East Asian Environment History Association. 台北市中央研究院 2011年10月26日。

⑥渡辺和之「観光化と地元の野菜売り：石川県輪島の朝市に見る都市＝農村関係の変化(1989-2011年)」日本地理学会、大分大学。2011年9月23日。

〔図書〕(計5件)

渡辺和之「移動のタイプとその変化：東ネパールの事例から」宮本真二・野中健一(編)『自然と人間の環境史』(ネイチャー・アンド・ソサイエティー研究第1巻)117-149頁。総項数396。2014年。

渡辺和之「ローカル・コモンズから森林利用者組織へ：東ネパールの羊飼いにみる放牧地確保の戦術」。横山智(編)『資源と生業の地理学』(ネイチャー・アンド・ソサイエティー研究第4巻)海青社。271-293頁。総項数350。2013年。

渡辺和之「ネパール・ヒマラヤにおける山地社会の変化と羊飼いの現在」国際山岳年プラス10実行委員会(編)『国際山岳年プラス10シンポジウム2012年研究集会報告書：みんなで山を考えよう』国際山岳年プラス10実行委員会。37-42頁。総項数141。2012年

橘健一「ネパール・空間構造と認識・」、立川武蔵、杉本良男、海津正倫編、『朝倉世界地理講座4・大地と人間の物語 南アジア』朝倉書店。265-280頁。総項数470。2012年。

Watanabe, Kazuyuki 2011 Land Use History of Grazing Pastures: A case of Himalayan transhumant sheep herders. *The Oxford-Nagoya Environment Seminar: The Environmental Histories of Europe and Japan*. Nagoya University, Nagoya, JAPAN. pp.127-147. 総項数267。2011年

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

渡辺和之「書評横山智・荒木一視・松本淳(編著)『モンスーンアジアのフードと風土』明石書店2012年p.260。」『広島大学現代インド研究：空間と社会』4: 55-57。2014年。

ホームページ等

6 . 研究組織

(1)研究代表者

渡辺 和之(Watanabe Kazuyuki)

所属：立命館大学・文学部・非常勤講師

研究者番号：40469185

(2)研究分担者

橘 健一(Tachibana, Kenichi)

立命館大学・産業社会学部・非常勤講師

研究者番号：30401425

(3)連携研究者

()

研究者番号：